



故 高野靖前事務局長を偲んで

本学会の前事務局長高野靖氏は、2020年3月17日にご逝去されました。ご持病の悪化が判明し、手術の甲斐なく享年75歳での急な旅立ちとなりました。ここに謹んでご冥福をお祈り申し上げます。

本学会では名誉会員がご逝去された場合に、学会誌に追悼文を掲載することになっています。事務局員であった方について追悼文を掲載するのは異例のことではありますが、高野氏の本学会に対する多大な貢献を文章に残しておくべきであるという理事会メンバーの総意によるものです。同時に、学会を支える事務局の活動について、会員の皆さまにお伝えすることができれば、高野氏のご貢献に少しでも報いることができると思い、会長として筆を執らせていただきます。

高野靖氏は、1944年にお生まれになりました。都立日比谷高校、東京大学農学部農芸化学科を卒業、東京大学大学院農学系研究科修士課程を修了されて、1970年に味の素株式会社に入社されています。その後同社のいくつかの研究所の所長や工場長などを歴任されてきました。同社退職後も、財団法人食品産業センター技術開発部長、日本食品添加物協会専務理事、東京農業大学非常勤講師、秋田県総合食品研究センター所長など、輝かしい経歴をお持ちです。2012年6月1日に本学会事務局長に就任され、2019年6月からは小出和之氏に事務局長をお譲りになり事務局員として業務を続けて来られました。

実は高野氏は筆者の学生時代の研究室の先輩です。同窓の集まりにもいつも顔を出して下さり、また飲みにも連れて行って下さったりする良い先輩でした。優しくて面白い先輩がいるものだなといつも思っていました。年月が経ち筆者は本学会の庶務理事として、次の事務局長の候補者を探すという任を与えられました。高野氏が秋田県総合食品研究センターの所長の任期が間もなく満了するということが真っ先に頭に浮かび、何度もお願いしてお引き受けただけなのを覚えています。

事務局の業務は実に多岐に亘ります。会員の皆さまに直接関係するところで、会員管理、会費管理や会計処理、学会誌編集、大会関係業務、授賞関係業務などは多くの方の頭に浮か

ぶところかと思えます。その他関係省庁対応（内閣府、日本学術会議、文科省、厚労省、法務局など）や、税務関係、公益法人の基礎的管理業務、理事会や総会、委員会の資料作成や運営、関係団体対応（日本医学会、日本栄養学学術連合、その他の学会や協会）、国際関係（国際栄養学連合やアジア栄養学会連合、海外の交流協定学会など）、等々切りがありません。事務局長以外に 2 名の事務局員とアルバイト数名で対応している状況です。学会事務局は今よりも狭く、高野氏は事務局長の机を用意するでもなく、会議テーブルの隅で大きな体を丸めてノートパソコンに向かってこれらの業務をこなしておられました。

さらに高野氏が事務局に入られた時期は、2015 年の第 12 回アジア栄養学会議（ACN）の準備が佳境に入りつつある時期でもありました。特に高野氏は長い経験により築かれてきた人脈を発揮していただいて、各企業様への募金のお願いでは大活躍されました。宮澤陽夫組織委員長と一緒に様々な会社を回られ、また同会議が成功裏に終了した後には宮澤先生と筆者をお礼のために各社に連れて行って下さいました。都内の地理をとことんまで把握していて、「あそこの本社なら何線の何番出口で待ち合わせましょう。」というのが何も見ずに出てくる方でした。会議期間中は、講演者の交通費や様々な書類が入ったリュックを担いで走り回って下さり、とても年齢を感じさせない動きだったのを鮮明に覚えています。

高野氏は、豪快なお酒の飲みっぷりなど外面は豪放磊落に見えましたが、一方で大変に細かいところまで気がついて、仕事でもプライベートでもそこまで気を遣っていただかなくても良いのと思うことがしばしばでした。折々に秋田の美味しいお酒を取り寄せて下さったり、ちょっとした打ち合わせでも有名店のお菓子を買ってきて下さったり、研究室の学生にも配慮していただいてました。様々な分野への知識も豊富でいらしたことなども含めて、「自分もいつか高野さんのような人物になれたらいいと思います。」と宴席で何度か告白したのですが、いつも一笑に付されておりました。高野氏のユーモア溢れる性格で、事務局を明るくしていただいたのも大きな貢献のひとつと考えています。ちょっとした失敗をしたときに、背中を丸めてペロッと舌を出す仕草を思い出さずにいられません。

高野氏には、2021 年開催の第 22 回国際栄養学会議（22nd IUNS-ICN）の終了までは事務局にお残りいただいて、そちらの業務を中心になって進めていただく予定でした。筆者は組織委員長として、高野氏の敏腕に頼ってしまえるということで、安心しておりました。高野氏は生前奥様の自慢話をよくされており、一度お目にかかりたいと考えておりました。それが叶ったのが皮肉にも高野氏の葬儀の場となってしまいました。「『カトちゃんのためにももうしばらく頑張る。』と言っていたんですよ。」という言葉をいただいて、堪えていた涙を止められなくなりました。

何としてでも ICN を成功させることが、高野氏の遺志に報いることであり恩返しになることと信じております。

合掌

（日本栄養・食糧学会会長 東京大学大学院農学生命科学研究科特任教授 加藤久典）